

# 私の幼児教育研究の宿題

(2)

三木 安正

## (2) 農村の保育所

精神発達の遅れた子どもたちの幼稚園をやつて、片方の足では農村の保育問題にどんどんと深入りしていく。そのきっかけは、私の奉職していた恩賜財團愛育会では愛育村という指定村をもつていて、育児、保健の指導をしていたので、時々、そのお手伝いに愛育村に出掛けたり、また農繁期保育所の速成保母養成の講習会の講師などをたのまれて地方巡りをしていくうちに、農村の子供の知能検査な

どもたのまれ、その結果が都會の子供のそれに比していちぢるしく悪いことについて、一体それが何に由来するのかといふことをつきとめてみたい気持になつた。それで神奈川県の高部屋村で農繁期保育所の保育指導を土地の女学生や東京からつれていた女子専門学校の生徒をつかつてやつたりした勢

をかつて、高部屋村に出来た社会保健館の建物の一部を活用して、常設保育所を作ることをはじめた。使用を許さ

な保母さんを一人常駐してもらひ、全村の学年前一年の幼児全部を対象にしようと、建前から、三部制の保育という新形態を案出した。というのは全村を三つの地域に分け、各冬期に三分の一づつ(つまり一回は一ヶ月弱)順番に保育するというわけである。従つてある一人の子供は四月と九月と一月に保育所にくるというわけである。三日目ごとにくるという形も考えられるのであるが、それでは農家の方で繁雑だという声があつたのでやめたわけである。

実をいえば、全村の子供を二群に分けて、一方は保育所に子供をさせ、一方は全然させないで、一年後に、その両者を比較するという方法をとれば一番よいのであるが、これは、保育所の必要性を大いに説き、全村の人には保育所をもりたててもらひたいという念願があつたので、そうしなかつた。この農村保育の研究は、一方において、その經營を愛育研究所の実験的保

育から村当局の仕事にうつすとい工う作をしながら進め、保育の効果も相当に見られて、昭和十七年ごろには秩父宮妃殿下がごらんになりにいらしたりしたことがあつたが、その反面、こんな仕事を一生懸命になるのは「赤」だろうといふような疑いをかけられて特高警察に引つけられるなどのことがあり、これも貴重な研究資料を放置したまゝ研究の方は尻切れトンボになつてしまつた。（その資料の一部は拙著「幼児の心理と教育」に使つてある。）さて、農村保育の研究で得られた経験としては、

第一に、保育所設置以前に就学期において知能検査をした結果は、その指數の平均は九〇前後であつたが（都會のインテリの多く住む地区的公立幼稚園では知能指數の平均は一〇〇ぐらいになる）保育所が出来てから各学期毎に検査をしてみると、次第に上昇して平均一〇〇近くになつた。

すなわち、農村の子供の知能検査の

結果の低いのは、素質として頭が悪いのではなく、文化的環境にめぐまれないこと、ことに離乳期ごろに子どもの身体発育がぐつと悪くなり、死亡率も高いことなどとも考え合せて、乳幼児期の育児の方法がわるいことによるのであらうということが主張できるようと思えたのである。

第二に、農村の子供は純朴であるといふようなことを一口にいふが、むろん、それを全面的に否定するものではないが、実は、なかなか、こすいところもあり、人のいうことをきかぬところもあるといふことを感じたのであるが、これは、やはり、農家の切りつめられた生活のあらわれであり、生活水準の低さということから起因することであるが、子供を子供らしくあつかつてやる余裕がなく、なにかといえば叱りとばすようなやり方から、大人とか他人とかを信用し得なくなつたことである。（つまり大人や他人に対して警戒心や猜疑心をもつてゐるわけである。）

これに対しても保育所にくるようになつて正しい主張は容れられ、約束したこととは守られるという経験をしたことには、少し大きさにいえば、彼等にとっては『おどろき』であつたであろう。

それ故に、子供たちは次第に警戒の衣をぬいでいつたように見られたのである。このことは、知能的な問題にも増して、重要なことであると思う。狭い土地しかもたず、封建的気風のきわめて強い、生活水準の低い農村の家庭で育てられる子供たちのパーソナリティが如何なるものに形成されて行くかということは、日本の将来ということとも関連してよく考えてみなければならぬ問題である。

第三には、農村保育所の經營を通じて得られた、一般の幼稚園や保育所のあり方とでもいつた問題である。

子供が生長して六才になると小学校に上がる。そうすると勉強は学校での仕事になるといつたことが、一般には何の不思議もなくうけとられており、

出来れば、それ以前に幼稚園の教育を受けさせたい」ということが、近來の風潮であるかの如く見られているが、いうまでもなく、小学校も幼稚園も、われの先輩が考へ出した教育のための組織である。六才を就学の時期にするといふことも先輩の諸氏がきめたことで、その当時の、もろもろの状勢によつたわけである。しかも、日本の教育制度は、先進諸外国からの輸入であり、そのようなものが「お上」から下されたわけであるから、そうした制度が、一般の大衆の要求や必要から出たものとはいえないし、また要求や必要を満たすために非常に心をくばつたものでもなかつたのである。

農村の幼児をとりまく教育的環境を考えてみれば、保健衛生に対する無関心、文化的施設や資材の不足、子供の人格の尊重といつた観念の不足等がすぐとりあげられるが、その根本に横わつているのは生活水準の低さや、封建的社會構造などであつて、これらを切り離しては、それぞれの改善ということは行い得ないものなのである。

そこで、教育の仕事がそうした改善の仕事を目標としている以上、どういふ形をとつたならば、最も効果的であるかといふことが考えられなくてはならない。こうした考え方から、農村の保育所を農村の生活文化の指導センターと考えるならば、そこにはいろいろの利点があり、それに応じて保育所經營の工夫が進められて行く。

農村の子供の生活文化水準を向上するためには農村生活の改善からはじめなければならないが、幼児は繁忙な農家では足手まといとなつてゐる反面、親の気持として、学校にあがる前の子供に對しては、何といつてもいろいろと心を使うものなので、その子供をこちらであづかつてやつて親の手をはぶいてやると共に、心がかりになつてゐる子供をしつかりにぎつていて、親に教育的な働きかけをすることは、きわめて効果が大きいわけである。母の会の出席率でも、保育所の出席率が一番高く、小学校も高学年に行くに従つて悪くなるのは、やはり、子供に対する心ずかしいの程度を示しているのであろう。そこで、こうした心ずかしいの一層高いものにし、高められた心ずかしいを技術的に具体化して行くことが、前記のような教育方針から必要になつてくることで、母の会の指導はきわめて重要な意義をもつことになる。農村の場合には、保健、栄養、衣服その他の一ぱん身近かな問題から、次第に教育の問題をとりあげて行くとともに、嫁姑の問題や女子青年の教養の問題にもふれなくて行く必要がある場合もあるう。

私共は、当時の国民学校高等科の女生徒や女子青年会の娘さんたちに保育の指導を行つたが、普通は興味をもたないで過してしまる家事育児のような勉強も、はじめから子供の世話をし、子供の心の理解が少し出来るようになると、次第に興味をもつてくるのであつて、高等程度の学校にすゝむものの

少ない農村などでは、現在でいえば中学校の時代に実習のある家庭科教育をよくやつておくことが有効であろう。

終戦後、農村の人手不足がほとんど解消したために、農繁期保育所も大体姿を消してしまつたようであるが、農村の民主化のために、また幼児の生活の向上のためには、農家の協同的經營による保育所が改めて考へられたらしいと思うのである。

### (3) 都会の幼稚園

農村保育所の經營から、幼稚園といふものは、家庭教育と学校教育との間にあるという点からも、また先ほど述べた育児文化の指導センターとなるべきだという点からも（育児・教育に關する考え方では都会の親には都會の親としての、たたき直されなければならぬ觀念がある。たとえば、利己主義的な教育觀、虚榮的な教育觀）幼稚園

の理想的な形は、地域社会の基盤に立つものといふことが考へられ、進んで

は父兄の經營する幼稚園といふものが考へられたが、終戦後、私は文部省の教育研修所（現在 国立教育研究所）の一員となり、所長城戸幡太郎先生の下で、このよろな幼稚園を作ることになつた。

教育研修所の所在する品川区上大崎の長者丸という土地は、その名の如く、豊富の人達の住宅地であるが、大都會としては非常にめずらしいことに、長者丸青年懇話会といふ青年会があつて、その会員は大てい男女の大学生であるが、それがレコード・コンサートとかダンス・パーティとか講演会とか運動会とか、いろいろな催しをやりたりして、可なりよくまとまつていたのである。

私はこの青年会の連中と提けいして、幼稚園の設立運動をはじめた。話し合いの結果、教育研修所は幼児教育の研究をするため保母を一人嘱託し、空いてる部屋を三室提供する。園児の定員は三十人前後であるが、

保母さんは一人ではだめだから、あと一人は父兄会の負担とする。といふわけで、父兄、青年を交えての数回の話合いで、地域の大きな支持のもとに発足した。（昭和二十二年）青年会の連中の奉仕によつて、砂場やブランコもしつらえられた。ところは国立の施設の中であつたが、きわめて民主的な形の幼稚園が出来たのである。

ところが、私はまもなく文部省に転勤となり、（その後も研修所業務で、しばしば研修所にもいつていたが）さらに病気のため長期間休養を余儀なくされ、この研究もまた尻切れトンボとなつてしまつた。

その幼稚園は、その後研究面では梅津八三氏、瀬川良夫氏の指導のもとに発足したが、経営面では、国立教育研究所附属幼稚園、すなわち国立幼稚園となり、さらに制度上の問題から、東京学芸大学附属として移管されそうになつたとき、地元のこの幼稚園を作つた人たちが立ちあがつて、ついに私立

白金幼稚園が設立されるにいたつた。

その園舎が落成したのは昨秋のことである。よいよこれからが一人立ちで歩むことになるが、私自身としては、国立幼稚園から私立幼稚園となつたことは、まことに慶賀にたえないところである。つまり、それは、親たちが本当に幼稚園教育の必要性を認め自分たちの力で幼稚園を作ろうといふところまで高まつたことは、まことに、すばらしいことだと感するからである。

この幼稚園の設立以来の研究テーマの中心は幼児教育におけるペーソナリティーの形成であつた。そして、それをいわゆる社会性、社会適応性という面から見るのであり、その線にそろて幼稚園教育におけるカリキュラムの構成といふことが問題となつてゐる。

私もまた今後研究メンバーの一人となつて幼児教育研究の仲間入りをしたいと思つてゐるところである。

幼児教育研究の面白さは、やはりペーナリティーの形成過程が比較的顕

著にみられるということであろう。

すなわち、ペーソナリティーに関しても主要な問題となるのは、対人関係あるいは人間関係における面であり、ある子供が、他人との関係において、あるいはその属する社会とか集団において、どんな様相をあらわすかといふことが、考究されるわけであるが、丁度

幼稚園の時期といふものは、家庭といふいわばたての序列をもち、保護された集団から一步ふみ出して、横に並ぶものの間でいわば席取り競争をするような事態におかれるので、そこでは、いままではかくされていたような面がおもてにあらわれてくるのであり、さらに相互に影響されて発展していくのである。

そうした関係における個人の様態をペーソナリティと見る立場からは、この時期における子供たちの行動の発展容はきわめて興味があるとともに、ペーソナリティの形成に關しては基本的な時期と考えられるわけである。あ

こうしたもののがあらわれは『遊び』において、あるいは『喧嘩』において、または絵画とか製作とかの表現活動において、つかんでいくことが出来ようし、いろいろの経験がどのように受け入れられて、外界の事象をどのように説明するかといったことにもあらわれてこよう。

こうしたもののあらわれは『遊び』において、あるいは『喧嘩』において、または絵画とか製作とかの表現活動において、つかんでいくことが出来ようし、いろいろの経験がどのように受け入れられて、外界の事象をどのように説明するかといったことにもあらわれてこよう。

こうしたもののあらわれは『遊び』において、あるいは『喧嘩』において、または絵画とか製作とかの表現活動において、つかんでいくことが出来ようし、いろいろの経験がどのように受け入れられて、外界の事象をどのように説明するかといったことにもあらわれてこよう。

しかし、これらることは、ただ興味があるといつてよろこんでいる問題ではなく、もし社会的に不適応な子供が

注目され、その原因がつきとみられて行くならば、それを社会的に適応して行けるようすに善導して行くにはこの頃の時期が最も都合がよいのであつた。そういうことの指導が出来るような保

ない。ところが、そうした教育的知見や信念を欠いて、神経質的傾向をもつ親たちの意向にのみ迎合して行くような教育をやつて行けば、幼稚園の教育は

である。このような機能を果し得るような幼稚園の経営保育の指導ということは、私の今後の宿題になるだろう。

むすび

尻切れトンボになる癖に、いろいろと大きな風呂敷をひろげてしまつた。

ପାତ୍ର କାହିଁଏବେଳେ ପାତ୍ରଙ୍କାରୀ

虫干といふものは、めったに見ない  
着物を早く処分してしまえばよいの  
だ。

あり、そうした指導原理に立づ保育案は、すべての幼児に対し、有効適切な保育をして行くものとなるはずであると思う。と同時にその指導原理は両親教育の指導原理をも導き出してくれるであろう。

たとえば、神経質の子供といふのは、どういう条件のもとから発生してくるかということを個々の事例について研究して行けば、それらのものに共通した問題が発見されるのであろうが、そうした条件は現在の世の中には、だんだん強く現れてくるようになつた生活条件であるのかもしれない。そういうことであれば、教育はその傾向を阻止して、健全な精神を養うような環境をしつらえて行かなければなら

園が母子の指導のセンターになるということは、都會の幼稚園なら都會の幼稚園なりに大切なこととなつてくるの  
るわけである。この意味において幼稚

面倒でも年に一、二回は出して風を通すこととなるのであるが、私の宿題も、こうした着物みたいなもので、するに付てられないで、時には虫干しをする必要があるのであらう。

あまり色があせてしまわなくて、ちに何とかものにしたいと思う。